「台湾、中国、そして日本－秘史を交えてその関係を考える」

2016年12月9日　台湾大学

産経新聞社　吉村剛史

はじめに　身近な問題・麻薬

１　「ドラッグとは何か」

・習慣性（依存性）および耽溺（たんでき＝欲求の増進や常習性、中毒症状）性

連用することによって慢性中毒をおこし、禁断症状を現す一連の薬物の総称で、麻薬取締法で指定された薬物および植物をいう。narcotic drugは国際的に麻薬をさす名称として定着。

・種類　Upper（覚醒剤、コカイン）、Neutral（大麻、マリファナ、LSD）、Downer（アヘン、モルヒネ、ヘロイン、シンナー）。

◆略史

・大航海時代の香辛料貿易（スパイストレード）の実態　貨幣の一種。市場の独占＝巨万の富（金、ダイヤモンド、アヘン貿易）。コロンブスなど大航海時代の冒険の動機。清教徒の欧州脱出。欧州各国の東インド会社（1600英、02蘭、04仏）。

・19世紀初頭、ドイツ人科学者セターナーがモルヒネを開発。戦争の主要軍需物資に。19世紀末には製薬会社ＩＧファルベン社がヘロインを開発。米では当初サミュエル・ラッセル氏のラッセル・アンド・カンパニー社が中心。傘下の有名麻薬ディーラー、ウォーレン・デラノはフランクリン・デラノ・ルーズベルト大統領の祖父。マッコイの名著「ヘロイン」

２　「日本とアヘン、ドラッグの深い関係（明治）」

・アヘン漬けの清国を反面教師に

大英帝国の武器アヘン。阿片戦争（1840-42）による大清帝国の惨状にショックを受けた幕末の志士たちの近代化、富国強兵への動機に。

・日本国内でアヘン栽培

日清戦争勝利で台湾の割譲を受けた日本。しかし当時の台湾はアヘン中毒者であふれていた。明治日本が打開の道、漸減政策のために採用した方策は薬用アヘンの国内栽培だった。

３　「同（戦前・戦中）」

・1930年代、日本は世界のヘロインの半分以上を産出していた。

（宮島幹之助「国際阿片問題の経験」より。社団法人日本国際協会・1935年）

その生産の舞台は…

・覚醒剤、東大の長井長義博士が1885年エフェドリンを発見。「突撃錠」「猫目錠」…

４　「同（戦後）」

・戦後ヤクザ抗争とドラッグ（軍の隠退蔵物資の中のヘロイン、ヒロポン）

・経済状況とシンクロしていた戦後のドラッグの流行

５　中国軍閥もアヘン利権を争奪した

・蒋介石は雲南アヘンを、閻錫山は山東アヘンを、張作霖は満州アヘンを、それぞれ傘下におさめた。毛沢東も延安でアヘン利権をにぎっていた。

・1949年、国民政府の遷台。雲南からタイ、ビルマ、ミャンマーの国境地帯「金三角」へ逃れた国民党第８軍（李國輝、李彌将軍）らがシャン族のアヘン利権をおさめた。

映画「異域」の世界。

国際的批判の中で台湾は金三角の国民党軍将兵の台湾への移住を促進。現地では台湾茶の栽培を指導。

おわりに　ドラッグをめぐる台湾、中国　日本の不思議な縁

・杜聡明（と・そうめい、1893年8月25日 － 1986年2月25日）は、日本統治時代の台湾人で初めての医学博士号を取得した医学者。台北帝国大学医学部教授。戦後は台湾大学で医学部長に。アヘンやモルヒネ、毒蛇などの研究功績。減量弁毒療法や尿検査法を確立、蛇毒成分からの鎮痛剤抽出や、赤痢特効薬の開発など、薬理学方面で特に活躍した。

・杜祖健（と・そけん、英語名Anthony T.Tu、アンソニー・ツ、1930年 －）は米国の化学者。コロラド州立大学名誉教授、千葉科学大学教授。毒性学および生物兵器・化学兵器の専門家として知られ、1994年の松本サリン事件で使用された毒物解明のきっかけを作った。2011年には、サリン製造の中心人物だった教団元幹部の中川智正死刑囚と東京拘置所で面会し、教団による殺人事件に使用されたVXガスが、自分の論文をヒントに製造されたことを知る。2009年叙勲、旭日中綬章。

略歴（よしむら・たけし）　1965（昭和40）年11月21日生まれ。兵庫県明石市出身。1990年、産経新聞社に入社。阪神支局、大阪・東京社会部で主に司法・行政をはじめ、宮内記者会で皇室を担当。2011（平成23）年から東京・外信部で主に中国関連報道に従事。11年6月から14（平成26）年5月まで台北支局長。その後大阪総局を経て2016年10月から岡山支局長共著に「地平らかにー天皇陛下と皇后美智子さまの十年」（産経新聞社）「ブランドはなぜ墜ちたかー雪印、そごう、三菱自動車事件の深層」（角川書店）など多数。